2024 年度

神奈川症例検討会　抄録集

日時：2024 年 11 月 9 日（土）14:00〜17:00
場所：横浜市立大学　講義棟 1 階　ヘボンホール

【注意事項】
・1 演題 10 分程度（質疑応答含む）でお願い致します
・Windows　PC を準備いたしますので、ご発表 20 分前までには受付をお願い致します
　Mac でデータ作成の場合は、必ず事前に Windows　PC で動作確認をお願い致します
　PC 持ち込みで発表ご希望の場合には、接続ケーブルの確認が必要になる場合がございます
　出来るだけデータ提供でのご発表にご協力をお願い致します
（ご発表後のデータは、責任をもって削除いたします）
・会場内でのお食事はご遠慮ください（飲み物は可）

◇◆一般演題◆◇

座長：三木　亨人
玉野井慶彦

1. 骨盤内から左大腿に及ぶ巨大腫瘍の一例

〇馬場英理子、林　礼人、飴井千佳乃、飯塚　光輝、川俣　友佳、松本　優衣、澤井祐美加、三木　亨人、奥山　智輝、北山　晋也

横浜市立大学附属病院　形成外科

73 歳女性。約 4 年前より、臀部に皮下腫瘍並びに違和感を自覚し、近医婦人科から他院整形外科等さまざまな医療機関受診したが、診断が確定しなかった。その後緩徐に腫瘍が増大し、排便困難感、頻尿、臀部違和感をきたすようになったため、当院当科へ紹介受診となった。MRI 上、骨盤腔内～左大殿筋内～左大腿後面皮下へ連続する内部均一な巨大嚢胞性腫瘤を認めた。腫瘍の診断並びに治療方針について検討を要した。

2. 胸骨全切除後に発症した肺ヘルニアの一例

〇室田悠美子、榮福　和希、大坪　翔、大井　皓介、小林　沙彩、玉野井慶彦、小久保健一

横浜市立大学附属市民総合医療センター 形成外科

症例は 67 歳男性、21 年前に急性大動脈解離に対して上行置換術を施行、術後の縦隔炎に対して大網充填術を施行し、その後は経過良好であった。X 年 Y-2 月、人工血管感染が疑われ当院心臓血管外科に緊急入院、切開排膿術を施行、その後胸骨全切除・人工血管再置換・大胸筋弁再建術を施行された。X 年 Y 月、胸部正中創の膨隆が出現し、CT 検査にて肺ヘルニアの診断となった。本症例の治療方針について検討する。

3. 「外耳の形態異常が著名な第一・第二鰓弓症候群の１例：次の一手は？

〇中谷　亜月、杉本　孝之、杉本　佳香、松尾　裕美、鈴木　沙貴、熊澤　憲一、根本　充、武田　啓

北里大学　形成外科・美容外科

第一・第二鰓弓症候群は、顔面や耳の形態異常を伴い、症状に応じて形成外科的手術が必要となります。今回の症例では、外耳が異常に大きく、耳介全体が肥大し形態が著しく歪んでいる点が特徴的でした。手術時期や内容の決定に難渋しており、皆様の討論とアドバイスをお願いしたいと考えています。

4.　小児の反復性静脈血栓症の一例

〇片岡　陸（かたおか　りく）、駒場千絵子、根本　仁

東海大学病院　形成外科

症例　10 歳女児 主訴　左下腿の有痛性皮下腫瘤。5 歳頃から皮下結節を自覚。経過をみていたが増大傾向、疼痛が出現したため精査を行い、摘出を行った。主に診断や治療に着目し、若干の文献的考察を行ったので、ここに報告する。

5.　Jones 変法術後の再発症例に対する修正術の経験

〇濵田　翔吾（はまだ　しょうご）、小島　康孝、門松　香一

昭和大学藤が丘病院　形成外科

加齢性の下眼瞼内反症に対して、Jones 変法は一般的に用いる術式である。今回、前医で加齢性の下眼瞼内反症に対して Jones 変法を施行されたが、早期に再発を認め、修正術を行った 3 例を報告する。2 例が Jones 変法を施行後 2 ヵ月で再発し、そのうち 1 例はさらに Hotz 変法を追加されていたが再発していた。 1 例は Jones 変法を施行後 6 ヵ月で再発していた。 3 例とも修正術を施行し、術後 3 ヶ月以上再発なく経過している。

6. 外陰部巨大尖圭コンジローマの一例

〇中野　生順（なかの　いより）、今橋優里花、矢吹雄一郎、山本　康

横浜労災病院　形成外科

巨大尖圭コンジローマは緩徐に増大するカリフラワー状の良性腫瘍である。遠隔転移は少なく局所浸潤性に進展するが、再発率が高く悪性化を認めることもある。今回、外陰部に巨大尖圭コンジローマを認める 22 歳女性の症例を経験した。外科的切除と焼灼術を施行し良好な経過を得たので、若干の文献的考察を加えて報告する。

7.　低位耳甲介残存型小耳症に対する耳介再建術

〇鈴木　崇弘（すずき　たかひろ）、小林　眞司、新保　成美、杉山　円

神奈川県立こども医療センター　形成外科

耳介低位かつ耳甲介残存型小耳症に対する治療経験を得た。残存耳介は外耳道を有し顎角付近に位置しており、理想位置までは 28mm 後上方へ移動する必要があった。術後の経過を踏まえて再建耳介の位置や形態などについて反省点と検討事項を報告する。

◇◆特別シンポジウム　鳥飼勝行先生を偲んで◆◇

座長：前川　二郎
武田　啓

鳥飼　勝行　先生

1972 年　横浜市立大学医学部卒業
1972 年　横浜市立大学病院　研修医
1974 年　神奈川県立足柄上病院　整形外科
1975 年　北里大学　形成外科
1981 年　北里大学病院　形成外科　講師
1992 年　神奈川県立こども医療センター　形成外科　部長
2000 年　横浜市立大学附属市民総合医療センター　形成外科　教授
2011 年　教授退官、その後も形成外科医として尽力された。
2024 年　逝去

8.　匠の形成外科医、鳥飼勝行先生の思い出

○前川　二郎

藤沢市保健医療センター

年が明け、まだ正月気分が残っているなか、突然の鳥飼名誉教授ご逝去の報にとても驚き、昨年まで何度も学会でお元気な姿を拝見していただけに信じられない思いでした。鳥飼先生と私は鳥飼先生が県立こども医療センター時代からのお付き合いで、先生の手術の巧みさには詳細な解剖の知識と理論的な裏付けがあり、感心することばかりでした。もう先生の手術を見ることは叶わぬ事になりました。どうか天国では先生の理想の手術をやり続けてください。ご冥福をお祈り申し上げます。

9.　私の Tr-ism と reverse Tr-ization の応用

○長西　裕樹

NACS クリニック　リンパ浮腫センター北横浜

先人の功績に対する評価は、時代によって移り変わる。2000 年頃の学会場では、口唇口蓋裂は「the 形成外科！」の領域として老いも若きも注目していたが、公立病院にも黒字経営が求められる時代になってからは、患者数が多くてタイパが良い手術が注目を集めるようになり、今となっては、大病院での保険診療にやり甲斐を感じない若者が急増している。さらに 20 年の間に少子化はさら進み、鳥飼先生の功績は、レアな患者とマニアな医師にしか役立たなくなってしまった。ここで型通りに故人の功の部分を誇張して話しても、先生を知らない若い世代には興味が持てないだろうし、色々と知っている世代には興覚めであろう。かくいう私も、師匠からの期待に応えられず転向した不肖の弟子に過ぎない。せめてもの手向けとして、鳥飼先生の手技だけでなく、長年の臨床や研究における主義(Tr-ism)を活かし、時には逆の手法（reverse Tr-ization）を用いて、教え子が飯を喰っていけていることを報告する。

10.　北里大学口唇口蓋裂診療班から感謝を込めて

〇鈴木　恵子

医療法人桜友会　おぎはら耳鼻咽喉科

口蓋粘膜弁法をベースに粘膜移植粘膜弁法、Foulow 変法と良好な鼻咽腔閉鎖と上顎形態を共に得る術式の工夫を重ねた鳥飼先生は、北里大学口唇口蓋裂診療班の実質的な立役者でもありました。言語聴覚士や保健師・看護師の乳児期からの継続支援、親の会の開催、精神科医・臨床心理士の関与などを提案、実現に尽力されました。良好な術後成績はもとより、成員が忌憚なく議論できるチーム医療の土壌を作られた鳥飼先生に、心からの敬意を表します。

11.　鳥飼勝行先生の思い出　ー口腔外科との接点ー

〇大村　進

横浜市立大学　歯科口腔外科

鳥飼先生とのお付き合いは、私がまだ福浦口腔外科に在籍時に当時口腔外科の教授であった藤田先生より週 1 日神奈川県立こども医療センターでの研修の機会といただいたことに始まり、鳥飼先生がセンター病院形成外科部長、初代教授を退官されるまで 20 年余の長きにわたる。この間センター病院形成外科と口腔外科は唇顎口蓋裂、顎顔面外科を中心に密な連携を行い、今もその思い出が尽きることはありません。

12.　私が経験した鳥飼勝行先生の手術症例　ー先生を偲んでー

〇木島　毅

東京西徳洲会病院　口腔外科

鳥飼勝行先生には北里大学から横浜市立大学、ふれあい横浜ホスピタルに至るまで数多くの歯科医師がお世話になってきた。小職も約 20 年間大変お世話になり貴重な症例を数多く経験することができた。先生は唇顎口蓋裂においては口蓋形成で生じる raw surface が顎発育障害の主因であると考えられ、粘膜移植粘膜弁法（MG 法）およびそれを発展され一期手術を考案され良好な治療成績を残された。今回その一部を報告する。

◇◆座談会◆◇

座長：林　礼人

（横浜市立大学　形成外科）

・前川　二郎　（藤沢市保健医療センター）

・長西　裕樹　（NACS クリニック　リンパ浮腫センター北横浜）

・武田　啓　（北里大学　形成外科・美容外科）

・鈴木　恵子　（医療法人桜友会　おぎはら耳鼻咽喉科）

・大村　進　（横浜市立大学　口腔外科）

・光藤　健司　（横浜市立大学　口腔外科）

・木島　毅　（東京西徳洲会病院　口腔外科）

・大久保文雄　（昭和大学　形成外科）

・赤松　正　（東海大学　形成外科）